

リヴィングストンの最後のアフリカ探検にみえる

第1期ナーシク・ボーイズの渡海経験—1866年から1873年まで

鈴木 英明

はじめに

1866年3月19日、デイヴィッド・リヴィングストンは英王立海軍のペンギン号でザンジバル島を発ち、同月24日にルヴマ川河口近くに降り立った。そこから始まる彼の探検は、結果的に彼にとって最後のものとなる。広く知られているように、ナイル川の水源を探し求めた彼は1873年5月1日、バングウェウル湖畔のイララにてその60年の生涯を閉じた。

彼の探検は同時代の欧米人にとって非常に大きな関心事であったし、その影響はアフリカ大陸に関する地理学的知識、植民地化、キリスト教の伝播、奴隷廃止など多岐に亘ってこれまで論じられてきた。これに対して、本稿でまず思い返したいのは、リヴィングストンの探検が単独行だったのではないという事実である。これはあまりにも当たり前のことなのだが、では、彼の探検の随行者とはいったい誰だったのだろうか。私たちはそれが単独行であるはずはなかったという点を想起できても、誰が彼に随行したのかについては想像力が働きにくい。アフリカ大陸に関する地理学的知識や植民地化、キリスト教伝播などといった従来のリヴィングストン評価を定める際の主要テーマを追求する限りにおいて、随行者が誰だったのかという問いに大きな重要性は認められてこなかったという点も想像力が働かない背景にあるだろう。しかし、次段落に述べるような関心に基づけば、随行者

がいかなる人物で、彼らが随行するなかでどのような経験をしたのかという問いに重要性が認められるべきだろう。

現在、筆者は、ボンベイ・アフリカンの渡海経験の総合的な分析を進めている。ここでいうボンベイ・アフリカンとは、19世紀のインド洋西海域における英海軍の奴隷交易廃絶活動の進展のなか、洋上で救出され、その後、様々な経緯を経てボンベイを経由し、聖公会宣教協会の運営するマハーラーシュトラ州ナーシクの伝道所附設のアフリカン・アシュラムという施設で教育を受けた一群の人々を示す。本稿で取り上げるリヴィングストンの随行者である「ナーシク・ボーイズ」もこのボンベイ・アフリカンの一部である。ナーシク・ボーイズを皮切りに、ボンベイ・アフリカンの多くはインド亜大陸からアフリカ大陸へと再び渡海していった。奴隷として海を渡るところから始まる彼らの複数回に亘る渡海現象を追うことで、19世紀のアフリカ大陸—とりわけ、その植民地化—に大きな影響を与えたアフリカ探検、同世紀のインド洋西海域に大きな変化をもたらした奴隷交易廃絶活動、そしてアフリカ大陸やその他のインド洋西海域周辺諸社会のみならず全世界的な展開を遂げていたキリスト教布教や奴隷廃止といった諸問題を結び付け、その総体を個人のレベルから再検討することが可能になるだろう。また、ボンベイ・アフリカンがインド亜大陸で数

年生活したのちに、どのようにして再びアフリカ大陸に戻り、そこでの経験——すなわちアフリカ経験——がいかなるものであったのかを検討することは、近年、大きく研究が進展し始めたが、いまだ大西洋偏重であるといわざるを得ないいわゆる解放アフリカ人 *liberated Africans* 研究¹に対して、インド洋西海域から貢献をすることにもなる。この方面に関心をさらに拡張していけば、アフリカン・ディアスポラ論における大西洋とインド洋西海域との比較も視野に入ってくる。

そのような構想を念頭に、本稿では「ナーシク・ボーイズ」に注目し、彼らの随行者としての動向をリヴィングストンの日誌類から取り出し、通時的に整理をすることを目的とする。リヴィングストンに随行した際の彼らの経験をたどることは次のような利点を有する。まず、彼らのアフリカ経験は他のボンベイ・アフリカンに先んじたものであり、また、ボンベイ・アフリカンに関する多くの記録が非常に断片的であり、個人を追跡することも困難である一方、ナーシク・ボーイズについては、リヴィングストンによる探検記録を利用することによって、通時的にその動向を追うこともできる。

ナーシク・ボーイズが参加したリヴィングストンの最後の探検については、1874年に刊行された『デイヴィッド・リヴィングストンの中央アフリカにおける最後の日誌、1865年から彼の死まで』²がその全行程を取り扱っている。彼の死後に刊行されたこの書は、UMCA

(Universities' Mission to Central Africa) の一員と

してアフリカ大陸で活動し、帰英後、反奴隷制協会に参加し、教区牧師としても活躍したホーレス・ウォーラー (1833-1896) がリヴィングストンの遺した日誌類に基づき編纂したものである。ウォーラーは奴隷制廃止活動家として活躍したことが広く知られており、ヘリーの研究によって、この刊本には、原資料の日誌類に書かれていたにもかかわらず、奴隷制廃止運動にすぐわないとウォーラーによって判断された多くの記述が盛り込まれていない点が明らかにされている³。ここで特筆すべきは、それらの多くが探検中の奴隷商人やナーシク・ボーイズとの関係性に関する箇所であるという点である。この点を踏まえれば、本稿でこの刊本を基礎資料とすることはできず、リヴィングストンの記した日誌類に立ち戻らなければならない。

また、ナーシク・ボーイズは最後の探検の開始時から参加していた第1期9名とリヴィングストン遭難の報を受けて結成された救出隊に随行した第2期6名に大別できる。本稿では第1期のみを扱う。第2期については別稿を用意している。

以下では、まずインド洋西海域における奴隷交易とその廃絶活動との関係性のなかにボンベイ・アフリカンとナーシク・ボーイズを位置づけたうえで、リヴィングストンの最後の探検に関する日誌類を主たる対象として、それらから第1期ナーシク・ボーイズの記事を集成する。それを踏まえて、渡海と彼らの属性——アイデンティティ——の関連のなかで第1期ナーシ

¹ 最新の研究として、Anderson and Lovejoy (eds.) 2020.

² Livingstone 1874.

³ Helly 1987.

ク・ボーイズのアフリカ経験を考察し、今後の課題を抽出したい。

インド洋西海域における奴隷交易とその廃絶活動、そしてボンベイ・アフリカンとナーシク・ボーイズ

インド洋西海域における奴隷交易は19世紀に最盛期を迎えるが、同時に、1817年にマダガスカル島のイメリナ王国と奴隷交易廃止に関する条約を締結して以降、イギリス帝国は各地の政権と次々に類似の条約を締結していく。それらを土台にして、奴隷交易船の検挙や船上の奴隷の解放といった実質的な成果がインド洋西海域で本格化するのには19世紀半ばごろである。そのなかで王立海軍をはじめとするイギリス側に浮上するようになったのが、救出された奴隷の処遇問題であった⁴。救出された奴隷は海軍の保護の対象となるのだが、それは廃絶活動の費用増加に直結する。したがって、海軍は救出奴隷をなるべく早く手放そうとするが、そこにはいくつかの困難が生じていた。たとえば、奴隷たちの出身地に送り戻せばよいという意見もあったが、これは第一に、19世紀半ばの段階で、取引される奴隷の出身地はアフリカ大陸に大きく限定されるようになってはいたが、内陸部に深く入り込むようになっており、出身地が広い範囲に亘っていたことから実際に実行することは難しかった⁵。これに関連して、第二の問題として、インド洋西海域で取引される奴隷の多くは男女問わずに幼少年が多数を占めるために、彼

らの多くは自らの正確な出身地に戻る方法を知らなかったことが挙げられる⁶。場合によっては、出身地の地名を知らない場合も存在したし、送還は送り返された先で再び奴隷にさせられてしまうという再奴隷化の危険性を常に孕んでいた。加えて、第三に指摘すべきは、救出された奴隷たち自身がアフリカ大陸への送還を拒む場合が少なくなかった点である。

そこで、救出奴隷を新たな生活拠点に送り届けるという選択がなされるが、その場合、働き口を斡旋する必要があった。成人でも再奴隷化の危険性は高かったが、幼少年の場合、その可能性はより高くなると考えられた。それを踏まえて、信頼のおける裕福な家庭に召使いとして引き取ってもらうという選択肢が存在したが、引取り可能な人数は限られる。そうして多くの幼少年の救出奴隷は、彼らを受け入れ対象とする保護施設に引き取られていくこととなる。

そのような施設は、19世紀半ばでは、特にインド亜大陸に複数存在していた⁸。こうした施設が学校を附設していない場合、そこを生活拠点にして、誰かしらの援助を受けて、学校に通う者も少なくなかった。実は、リヴィングストンが1864年にザンベジ川とルヴマ川を遡上する第2次アフリカ探検を終えたのち、ボンベイに身を寄せた際、この探検からリヴィングストンに同行してボンベイにやって来たヤオ出身の元奴隷チュマ（ジュマ）やウェコタニ、スシは、リヴィングストンの支援を受けて、聖公会宣教協会の宣教師ウィルソンが設立し、現在でも名門と

⁴ 鈴木 2007, 18; 鈴木 2016, 114-115; Hopper 2020.

⁵ たとえば、1860年のザンジバル島におけるイギリス臣民所有奴隷の一斉解放で作成されたリストからは、少なくとも84の集団名が抽出できる(Suzuki 2012)。

⁶ Suzuki 2017, 73-96.

⁸ IOR/R/15/1/149/20 [Anderson to Kemball, Bombay, 6 February 1855].

して知られるウィルソン大学で学んでいる⁹。チュマやウェコタニは英語のほか、ヒンドウスターン語やマラータ語も学び、特に英語の読解には目覚ましい上達を見せたとき、ウィルソンとリビングストーンは離印前に彼らに洗礼を施している¹⁰。

救出奴隷子女の保護施設のうち、最も広く知られたのが聖公会宣教協会のナーシク伝道所に附設されたアフリカン・アシュラムであった。アフリカン・アシュラムは、1853年に同協会ボンベイ伝道所通信員のキャンディーとボンベイ在住の篤志家のドイツ人商人夫妻がボンベイに設立したアフリカ系幼少年救出奴隷のための保護施設兼学校を起源に持つが、この篤志家夫妻の商業的没落や死去などを経るなかで、引取り手が転々とし、最終的に1860年にボンベイ政府の仲介でナーシク伝道所がそれを引き取り、ナーシクに移転した経緯を持つ。当初、男子のみの受け入れだったが、1863年にはボンベイに残っていた女子部を統括する女性が死去したのを受けて、女子部も併合された¹²。この施設に入った者たちは、一般的に12歳以下は伝道所が運営するマラータ語普通学校に通い、それより年長者は同じく伝道所附設の職業訓練校に通い、木工や鍛冶、織業を徒弟制のもとで学んだ。

1832年に開所したナーシク伝道所は孤児院や職業訓練校を附設しており、当初から、孤児の自立について積極的な取り組みを行ってきた。アフリカン・アシュラムの方針もまた、これに沿ったものであると考えられる。結婚を機に退所する者や手に付けた技術で独り立ちする者も現れるようになり、常に入退所が行われていた。

注意したいのは、ナーシク伝道所の宣教師たちがアフリカン・アシュラムの青少年たちにかける期待がそこに留まっていたわけではない点である。表1はアフリカン・アシュラム在籍者の日課をまとめたものである。職業訓練学校に通う者とマラータ語普通学校に通う者とは就学時間に差があるが、ここで注目したいのは、午前8時から始まる朝の祈祷や3度の食事、午後7時台の晩の祈祷や英語教室は、どちらの学校に通うかを問わず、同じ日課となっている点である。これらはアフリカン・アシュラム在籍者のみに適用される日課であった。つまり、マラータ語普通学校や職業訓練学校ではアフリカン・アシュラム在籍者はそこに在籍しない他の生徒とともに学んだり、作業をしたりするが、その一方で、これらの日課はアフリカン・アシュラム在籍者だけを集めて行われていた。また、マ

⁹ Edwardes 1909, 133-134; Simpson 1975, 55.

¹⁰ NLS Ms.10704, 29 [David Livingstone to Agnes Livingstone, Bombay, 17 November 1865]; Simpson 1975, 55.

¹² Report 1863, 7

表 1. アフリカン・アシュラムにおける日課(Report 1862, 23 などに基づき筆者作成)

	職業訓練学校通学者	マラータ語普通学校通学者
午前 0 時	就寝	
午前 1 時		
午前 2 時		
午前 3 時		
午前 4 時		
午前 5 時		
午前 6 時		
午前 7 時	マラータ語学校	
午前 8 時	8:00 朝の祈禱、沐浴、着替え、朝食	
	8:30～ 工房での作業	休憩
午前 9 時		
午前 10 時		マラータ語学校
午前 11 時		
正午		
午後 1 時	1:00～1:30 正餐	
	1:30～5:30 工房での作業	休憩
午後 2 時		2:00～5:00 マラータ語学校
午後 3 時		
午後 4 時		
午後 5 時		休憩
	自由時間	
午後 6 時	晚餐	
午後 7 時	晩の祈禱	
	英語教室	
午後 8 時		
午後 9 時	就寝	
午後 10 時		
午後 11 時		

ラータ語や英語が教授される一方で、彼らの母語であるアフリカ諸語の使用が奨励されてもいた。宣教師たちは将来のアフリカ宣教における有益な人材の発掘と育成をアフリカン・アシュラムの大きな使命と考えており、それに従った教育や生活が実践されていたのである。

リヴィングストンは1865年9月半ば、当時、滞在中だったボンベイからナーシクへと足を伸ばし、アフリカン・アシュラムを視察している。そして、彼は「子供たちが実に上手に、美しくアフリカ的な旋律を歌っていて、大体25名ほどが自分たちの言葉で歌っていた」¹³のを目撃する。このことがわざわざ特筆されるのは、訪問の目的が「そこに私にあったアフリカ人がいるかどうかを探すため」¹⁴、つまり、当時、彼が準備中だったアフリカ探検に有用な人材を探すためであったからである。この時の日記には、彼がナーシク伝道所の子供たちを随行員に招聘するのを即決したかについては記されていないが、同年11月17日の手紙には8名をナーシク伝道所から招聘したことが記されている¹⁵。最終的には9名がリヴィングストンに同行し、ボンベイを離れてザンジバルへと向かった。彼らのがのちにリヴィングストンの日記や書簡の類でナーシク・ボーイズと呼ばれるようになる一行である。名前と概要については表2にまとめた。

ルーベン・スミス Reuben Smith	1866年7月29日離脱
エドワード・ガードナー Edward Gardner	探検を全う
ナサニエル・クンバ Nathaniel Kumba (マブルーキ Mabruki とも呼ばれる)	探検を全う
サイモン・プライス Simon Price	1870年8月17日離脱
エイブラハム・ペレイラ Abraham Pereira (Abram, Ibram とも綴られる)	1870年8月17日離脱
ジェームス・ルットン James Rutton	1871年2月4日殺害
リチャード・イセンバーク Richard Isenberg	1866年6月18日頃病死
アルバート・バラカ Albert Baraka	1867年9月1日離脱
アンドリュー・パウエル Andrew Powell	1866年9月4日離脱

表2. 第1期ナーシク・ボーイズの一覧

¹³ DLC/1123/15 September 1865].

¹⁴ DLC/1123/14 September 1865].

¹⁵ NLS Ms.10704, 29 [David Livingstone to Agnes Livingstone, Bombay, 17 November 1865].

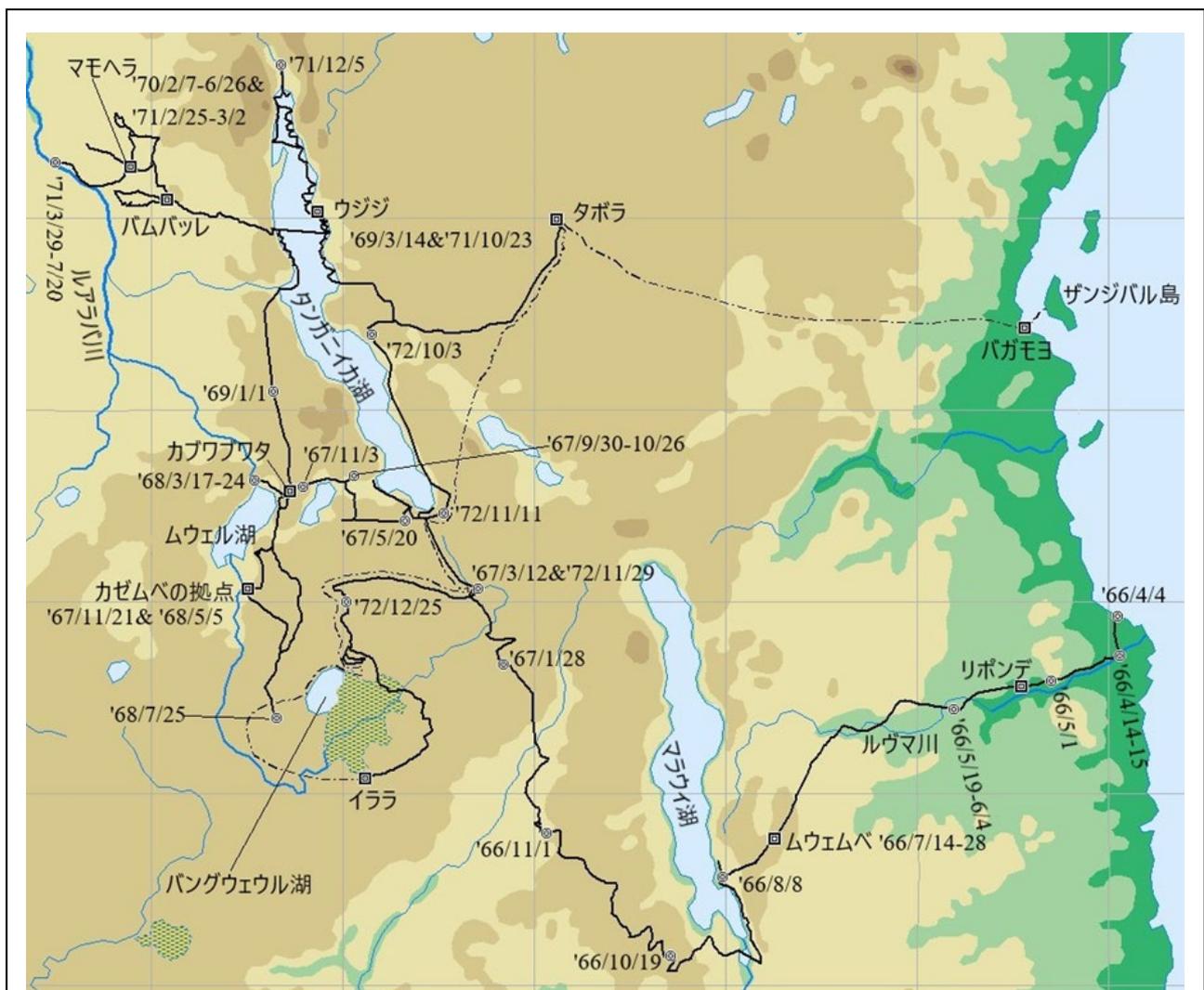
最後の探検関連日誌類に見えるナーシク・ボーイズの活動

最後の探検の概要

本章では、リヴィングストンの最後の探検におけるナーシク・ボーイズの活動を再構成する。すでに述べたように、ウォーラーによって編纂された刊本は本稿の目的を達成するには不十分である。そのため、以下の記述はスコットランド国立図書館やリヴィングストン研究セン

ターなどに所蔵されているリヴィングストンが記した日誌類やそれ以外の同時代記録に基づいている。

リヴィングストンの最後の探検とここで呼ぶのは、1866年から彼が死去する1873年まで行われたナイル水源の解明に焦点を当てた探検を指す（地図1参照）。この探検の地理範囲は、現在でいうタンザニア、モザンビーク、マラウイ、ザンビア、コンゴ共和国にまたがる地域に



（地図1）リヴィングストン最後の探検における行路

Livingstone 1874 付図をもとに情報を加筆修正し、筆者作成。実線部分はリヴィングストン在命中の行路、日付は通過ないしは滞在期間を示す。リヴィングストン死後の行路は破線で示した。

広がっている。リヴィングストンはそれまでの探検からアフリカ大陸内陸部の水系に関して3本の主要流路がナイル川に接続しているという推論に至っており、ヨーロッパ人に未発見のルアラバ川がそれらうちで最大であるという仮説の証明がこの探検の最大の目的であった¹⁶。

この探検がそれまでに彼の経験した探検と異なる最大の点は、資金面にかかわる。たとえば、1858年から1864年までのザンベジ川探検の際には英政府から5000ポンドの資金を提供され、そこからこの川を遡行するための外輪船を用意する資金も捻出されたが、この探検が失敗に終わると、英政府はアフリカ大陸東部や中央部での探検事業に予算を振り分けるのをためらうようになる¹⁷。英政府や王立地理学協会からも十分な資金援助を受けられなかった彼は、私財を投げうつなどして資金を確保する。したがって、資金は潤沢という状態からほど遠かった。このように、大規模な探検隊を組織できなかったリヴィングストンは、アフリカ大陸東部出身で、かつ宣教団のもとで教育を受けたナーシク・ボーイズには随行者として非常に高い期待を抱いていたと考えられる。

リヴィングストンはこの探検の開始時、第1期のナーシク・ボーイズ9名のほかに、やはりインドで集めた13名のスイパーヒー、10名のコモロ諸島アンジュアン（ジョアンナ）島出身

者、また、ザンベジ川探検以来、リヴィングストンと行動を共にしていたチュマやウェコタニ、スシらを擁する探検隊を組織していた¹⁸。1866年2月10日の日誌にはリヴィングストンから隊員に支給した物品とその額が記されている。それによれば、6シリング相当のジャンパーをナーシク・ボーイズはそれぞれ受け取っており、同額のジャンパーはアンジュアン島出身者らにも支給されている¹⁹。

ザンジバル島出発からリチャード・イセンバーグの死まで

ザンジバル島に到着した一行は、2月18日、スルターンに謁見しているが、その際の記述のなかに次のような一節がある。「私はナーシク・ボーイズについて、彼らは奴隷制のもとから救出され、教育を施され、そうして自らの国に（ボンベイ）領事から送り返された者たちであると（スルターンに）説明した。スルターンは、地球上には自分勝手な動機以外の何かに突き動かされて行動する人々が確実に存在するのを目の当たりにしたはずである」²⁰。また、リヴィングストンはザンジバル島で探検の準備を進めるなか、隊員の性格や適性についても観察しており、3月26日には次のような記事がみられる。「2, 3名のナーシク・ボーイズは些か強く奴隷根性を携えている。それは漆黒の肌を持つ者たちの奥深くに染み渡っているものである。

¹⁶ 実際にはこの推論は正しくなく、ルアラバ川とはタンガニイカ湖の西側でこの湖と並走するように南北に流れる川であり、それはコンゴ川となりキンサシャを通過し、最終的には大西洋に流れ込む河川である。

¹⁷ John McCracken, *Politics and Christianity in Malawi, 1875-1940: The Impact of the Livingstonia Mission in the Northern Province*, Zomba: Christian Literature Association in Malawi, 2000 (1st. ed. Cambridge: Cambridge University Press, 1977), 54-55.

¹⁸ DLC/1115/33 [entry on 18 March 1866].

¹⁹ DLC/1123/no date.

²⁰ DLC/1115/29.

ガッラ出身の2名は彼らのなかでもっとも知的で勤勉である。ただし、ほかの者が頑張っているときに、それを無関心に傍観している者もいる」²¹。

アフリカ大陸に渡った一行は、当初から様々な困難に遭遇する。繰り返し一行を悩ませたのが病気であった。食糧や交換のために持ち込んだ牛馬は1866年4月7日に眠り病を媒介するツェツェバエに最初に噛まれたのを契機に、徐々に数を減らしていくし、4月16日からはスイパーヒー、アンジュアン島出身者たちに続き、ナーシク・ボーイズに熱病の流行が見られた²²。そのなかでもリチャード・イセンバーグについては、4月10日の段階でキニーネなどが与えられたが、その後も頭痛が続いていた²³。

4月29日にはルヴァ川岸のマコンデの人々の集落につくと、リヴィングストンはナーシク・ボーイズを介して住民と交流を図ろうとする。しかし、ナーシク・ボーイズのなかにマコンデ出身を名乗っていた者がいたにもかかわらず、彼らはマコンデの言葉ができないことを理由に通訳を断り、交流の試みは失敗する²⁴。4月30日には食糧不足が生じはじめ、スイパーヒーたちに続き、ナーシク・ボーイズからも不満の声が上がりだした²⁵。

そのような状況下の5月3日、現地の男性がやって来て、隊のなかの誰かが自分の畑のモロ

コシを刀で切ったと訴える。それを受けて、エイブラハムともうひとりの随行員が状況確認のために派遣された結果、ナーシク・ボーイズの曳くラバに積載していた荷物で茎が2本折れていたことが確認された。これに対して、リヴィングストンはナーシク・ボーイズの不注意さに対する不満を日誌に記している²⁶。5月8日にリポンデという集落に到着すると、リヴィングストンはスイパーヒーのハヴェリダールとナーシク・ボーイズをこの集落に残し、牛馬と共に休養を取らせ、先に進む²⁷。その翌日の日誌には「スイパーヒーやナーシク・ボーイズたちから離れることができず済々としている」と記されている²⁸。リヴィングストンはナーシク・ボーイズが牛馬に過重に荷物を載せていることをしばしば咎めていたが、彼らがそれを意に介することはなかったという。それどころか、アルバート・バラカが既に過重に積載していたラバのうえにメイズの袋を載せたために、ラバが転倒してしまったことをリヴィングストンは日誌に書き記している²⁹。このように、探検が始まって間もない段階で、すでにリヴィングストンとナーシク・ボーイズの関係は相当に悪化していた。リヴィングストンは「彼らは何かの罪を犯したがゆえに故郷から売り飛ばされたのではないか」とすら推察しているし、先述のラバを転倒させたアルバート・バラカはその結果としてラ

²¹ DLC/1115/37.

²² DLC/1115/44, 50; DLC/1124/15 April 1866, 24 April 1866.

²³ DLC/1124/10 April 1866

²⁴ DLC/1115/56; DLC/1124/29 April 1866. 同様の問題は1866年6月3日の日誌にも記されている(DLC/1125/3 June 1866)。

²⁵ DLC/1124/30 April 1866

²⁶ DLC/1124/3 May 1866

²⁷ DLC/1115/64.

²⁸ DLC/1115/65.

²⁹ DLC/1115/65; DLC/1124/9 May 1866.

バを取り上げられた際、もう隊に貢献することを一切しないと大声で叫び、そのうえ、リヴィングストンがこのような野蛮な国に自分たちを連れてきたことは犯罪なのだという内容も怒鳴り散らしたとされる³⁰。これに対して、リヴィングストンは棒で彼を叩いたが、その際にこのナーシク・ボーイは「鉄砲を持ってきて俺を撃ちやがれ、それでも俺は何もしないぞ」と言い、リヴィングストンはさらに強打したという³¹。

リポンデに残したナーシク・ボーイズの一員のエイブラハムが1866年5月20日にリヴィングストンのもとにたどり着き、スイパーヒーらが隊を離脱する意向であることを伝える³²。エイブラハムはリヴィングストンからの伝言を預かり、再びスイパーヒーたちのもとに戻り、27日にハヴェリダールとともにリヴィングストンのもとに再び現れた。スイパーヒーらはハヴェリダールの嘆願によって帰隊を果たすが、彼らはその後もナーシク・ボーイズを説き伏せ、意図的に大変遅い速度で本隊について行った³³。スイパーヒーとナーシク・ボーイズは互いに意思疎通が可能で、リヴィングストンはナーシク・ボーイズを介してしかスイパーヒーらと意思疎通が図れなかったと記していることから、スイパーヒーやナーシク・ボーイズはマラータ語ないしはヒンドゥスターン語で会話をしていたと考

えられる³⁴。こうした状況に業を煮やしたリヴィングストンは、6月4日、ナーシク・ボーイズらに随行の継続か帰国かの二択を迫る。彼らは随行の継続を選び、それぞれに荷物が割り振られた。

この時点で、4月初旬から熱病を契機に体調を崩していたリチャード・イセンバークは本隊から遅れを取っており、彼につき添っていたエイブラハムの献身的な看護をリヴィングストンは評価している³⁵。6月7日には、エイブラハムがハヴェリダールや2名のスイパーヒーと共に本体に合流を果たすが、リチャードは衰弱のためにいまだ遅れをとっていた。リチャードの救出のために、隊の中からサイモン・プライス、ルーベン・スミスとナサニエル・クンバが選ばれ、彼のもとに送られる³⁶。6月18日、スイパーヒーらとともにサイモンとルーベンが帰隊し、エイブラハムがリチャードのもとを離れた2日後にリチャードが死んだことが本隊に伝えられる³⁷。リヴィングストンは自らが看病しなかったことなどの後悔の念を日誌に露わにする。他方で、リチャードがスイパーヒーと近すぎる関係を築いてしまったことを批判している³⁸。それが意味するところは、以下のようなものである。リチャードの体調が本格的に悪化するなか、彼はナーシク・ボーイズではなく、ス

³⁰ DLC/1115/65.

³¹ DLC/1115/65; DLC/1124/9 May 1866.

³² DLC/1115/72; DLC/1125/20 May 1866.

³³ DLC/1115/76; DLC/1125/30 May 1866, no date.

³⁴ DLC/1115/77.

³⁵ DLC/1115/77; DLC/1125/7 June 1866.

³⁶ DLC/1115/79; DLC/1125/15 June 1866.

³⁷ DLC/1115/86; DLC/1125/18 June 1866.なお、DLC/1115/745には1866年2月1日の項目で、彼の死が述べられている。それによれば、サイモンはリヴィングストンに託された解熱剤を強すぎるだろうという理由でリチャードに与えなかったことがその死と関連付けられるようにして記されている。

³⁸ DLC/1115/87.

ィパーヒーらと共に過ごすことが多かった。リヴィングストンはスィパーヒーらが仮病を使うことを知っており、なおかつ、彼らの言語を理解できなかったため、リチャードの体調悪化もスィパーヒーに唆され、仮病を使っていると理解し、真剣に捉えていなかったのだと日誌で自己弁護を行っている³⁹。リヴィングストンは、6月7日に本隊に再合流したエイブラハムによって、リチャードがスィパーヒーらに取り残され、独りで道中の集落で病に伏していることを聞き、漸く事態の深刻さを理解したのであった⁴⁰。

リチャードの死亡が報告された日、リヴィングストンはスィパーヒーを呼びつけ、彼らにナーシク・ボーイズに帰国を唆さないようにとくぎを刺している⁴¹。リヴィングストンの記事による限りでは、スィパーヒーらとナーシク・ボーイズの関係性とは、前者が後者を恐喝して小間使いに用いるなど、自らの意のままに操ろうとするものであった⁴²。この密接な関係性はリヴィングストンをたびたびいら立たせていた。6月24日の日誌では、スィパーヒーらがナーシク・ボーイズを自らと引きはなそうとしていると記している⁴³。

アンドリュー・パウエルの離脱まで

これ以降、リヴィングストンはスィパーヒーとの関係性以外にも、ナーシク・ボーイズへの不満をたびたび日誌中に吐露するようになる。

たとえば、6月29日には、彼らのうちのひとりが240ベールのキャリコの入った包みを紛失したことが報告された。本人の報告によれば、道にそれをひとたび置いて、少々脇道に逸れている間になくなってしまったというが、リヴィングストンは昼寝をしている間に盗まれたのだろうと推測している⁴⁴。これらの布地は道中、探検を円滑に進めるために現地の有力者への贈り物や食糧調達のための物々交換などに用いる物資であり、こうした紛失の痛手は小さくなかった。この一件以降、ナーシク・ボーイズによる紛失事故が相次いで日誌に現れる。特に7月14日から28日のあいだにナサニエル・クンバが布地を、ルーベン・スミスが弾薬をそれぞれ大量に紛失したことが日誌に記されている。ただし、それらは単純な紛失ではなく、リヴィングストンは彼らがそれらを勝手に売却したと推測している⁴⁵。これらは推測にほかならないが、一行はちょうどこの頃、ニヤサ湖南端付近の東岸からやや内陸に入ったマタカ王国の首府ムウェムベを通過しており、売却に都合のよい条件下にあったのは確かである。その一方で、別の隊員による荷物の売却をめぐる、ナーシク・ボーイズが命を狙われる一件も発生した。たとえば、1866年7月20日の日誌では、スィパーヒーらがサイモン・プライスを秘密裏に殺害しようとしていることが記されている。これは、スィパーヒーらが弾薬を売って現地の人々から家禽を獲得しようとしているのをリヴィングストンが関

³⁹ DLC/1125/18 June 1866.

⁴⁰ DLC/1125/18 June 1866.

⁴¹ DLC/1115/87.

⁴² 本文で挙げる事例のほかにも、たとえば DLC/1115/114/14 July 1866; DLC/1142/23 July 1866.

⁴³ DLC/1115/90.また、同様の記述は DLC/1125/20 July 1866 にも存在。

⁴⁴ DLC/1115/97; DLC/1125/29 June 1866.

⁴⁵ DLC/1115/110-111.

知した件について、サイモンによる告げ口のせいであるとスイパーヒーらが誤認したことによる⁴⁶。

ナーシク・ボーイズに大きな変化が生じるのがちょうどこの頃である。まず、マタカー世ニャンビのもとを出発して以降、ルーベンとアンドリュー・パウエルは本隊から遅れをとる。アンドリューのみがリヴィングストンの送った迎えに応じて本隊に再合流し、彼は胸の痛みのために遅れたことを報告した⁴⁷。リヴィングストンは再度、ルーベンに迎えを出す、ルーベンはそれに対して隊からの離脱を宣言した。彼はニャンビのもとに向かったとされる。リヴィングストンはこの離脱について「幸福な厄介払い」と極めて短く感想を述べている⁴⁸。

別の一件はエイブラハム・ペレイラについてである。彼はムウエムベで一行を見物しに来た群衆のなかに自らのおじを見つける。おじはムウエムベに残ることを説得し、そこにニャンビや別のおじ、さらにはリヴィングストンも加わり、説得をするが、エイブラハムはそれを拒否する。その際に「母も姉妹もない場所にどうやって留まることができるのでしょうか」と述べたという⁴⁹。彼はおじから母と姉妹もアラブ人に売られてしまったことを聞いていた。リヴィングストンはエイブラハムに、インドに戻って結婚してから再び訪問すればよいと伝えたと日誌に記しているが、同時に、ヨーロッパ人が連れ

てこない限り、ナーシク・ボーイズが再びこの地を訪れることはないだろうとも記している⁵⁰。加えて、彼らは自らの能力に過大な自信を持っているが、実際には農業を学んでいないために、この地では活躍ができないだろうとも記している⁵¹。

このように、ナーシク・ボーイズの資質を冷淡に分析する一方、ムウエムベで自分と同じく赤痢の症状にあったナーシク・ボーイズの1人を自らの部屋に招き、そこで休ませている⁵²。ニャンビのもとを離れてしばらく経った9月4日、アンドリュー・パウエルが離脱する。この頃、本隊からの迎えが来るまでずっと後方に滞留するのを繰り返したスイパーヒーらを見ていたナーシク・ボーイズは、何か不満が生じるたびにそれを模倣するようになっていた⁵³。この日、すでに振り分けられていた荷物に追加で毛布と布地を運ぶよう指示されたアンドリューがこれに立腹すると、リヴィングストンは彼をラタンで12回打ち、随行を辞めて、故郷に戻るか、さもなければ、指示に従うように命じた。アンドリューはこれを受けて、隊を離脱する。リヴィングストンは「あいつをお払い箱にしてとても嬉しい」と短い感想を記している⁵⁴。アンドリューはニャンビのもとに戻ったとされるが、リヴィングストンは、そこには食糧が豊富だが、彼がやれることは何もないとし、「奴隷の少年らがどんな教育を受けようとも、きわめ

⁴⁶ DLC/1142/20 July 1866.

⁴⁷ DLC/1142/29 July 1866.

⁴⁸ DLC/1115/110.

⁴⁹ DLC/1115/112; DLC/1142/27 July 1866.

⁵⁰ DLC/1115/112.

⁵¹ DLC/1115/112.

⁵² DLC/1115/118; DLC/1142/20 July 1866.

⁵³ DLC/1142/4 September 1866.

⁵⁴ DLC/1115/148.

てごくまれな例外を除いて、部族のもとに行き、その部族のために宣教師として働く者などいるのだろうか」と自問する⁵⁵。そのうえで、そうした少年らは宣教団の助手としては、こちらが手綱を強く握っている限りは有益になると述べ、そのうえでナーシク・ボーイズについて、自分たちがナーシクで学んだ鍛冶や木工、製靴の腕に過剰な自信を持っているが、木工以外はこの地で何の役にも立たないと記している⁵⁶。

エイブラハム・ペレイラの通訳問題まで

その後、バングウェウル湖を通過し、一行がタンガニカ湖西岸付近のマンガンジャの人々のある首長と出くわした際、その首長から自らの民、あるいは自分自身とその妻たちの隊への同行を強く懇願される一件があった。1866年10月5日の日誌によれば、この騒ぎのなかでサイモン・プライスは首長の発話のなかからふたつの単語を聞き取り、別の集団がやって来て一行を殺戮すると首長が語っていると解釈し、リヴィングストンに伝えている⁵⁷。リヴィングストンはナーシク・ボーイズに通訳としての活躍も期待しており、特にサイモンについては、「私の通訳」として日誌に登場する場合もある⁵⁸。11月3日から5日はサイモンが病に伏したために本隊は足止めを喰らっている⁵⁹。サイモンは11月21日にも病に伏しており、ヤギの脂をこすったために発疹が出たとリヴィングストンは記して

いる⁶⁰。リヴィングストンはリチャードの場合がそうであったように、体調などの都合で後れを取る隊員がいても本隊の進行を止めない場合が多々あったことを踏まえれば、サイモンの体調不良が原因で本隊を足止めしたことは、それだけ探検遂行に果たすサイモンの役割をリヴィングストンが高く評価していたと解釈することもできるだろう。事実、この時期、サイモンとリヴィングストンは良好な関係を築いていたようで、1867年1月9日の日誌では、手持ちの食糧が底を突いたリヴィングストンにサイモンは自らの食糧の一部を渡しており、その二日後の朝食時にもサイモンは自ら絶食し、その分をリヴィングストンに渡している⁶¹。

その後、1月末に再びニヤサ湖とタンガニカ湖のあいだの地域に戻った一行は、チタパングワあるいはモトカと呼ばれる首長のもとを訪れるが、ここで問題が発生する。1月31日に一行が首長に謁見した際、彼は一行に自らの所有する牛の一群を見せ、そのうちの一头を与えた⁶²。その際に通訳をしたエイブラハムが返礼品は何でもよいと伝えたので、翌日、リヴィングストンは手持ちのなかで最上の布地を差し出した。しかし、2月4日、首長の集落を少々離れ、隊がヤギを買いに行くことを伝えると、首長はリヴィングストンが手持ちの持ち物を見せびらかすだけで、何も自分から購入していないと激昂し、贈与した牛を食すように求め、リヴィング

⁵⁵ DLC/1115/148.

⁵⁶ DLC/1115/148.

⁵⁷ DLC/1115/176; DLC/1126/5 October 1866.

⁵⁸ DLC/1115/111.

⁵⁹ DLC/1115/204.

⁶⁰ DLC/1115/212; DLC/1127/19 November 1866.

⁶¹ DLC/1115/238, 239.

⁶² DLC/1115/251-252.

ストーンはこれに応じた。一行は6週間以上ぶりに牛肉を味わった⁶³。その後、リヴィングストーンはさらに布地の贈り物をするが、首長はそれらを突き返し、ナーシク・ボーイズがリヴィングストーンから与えられた毛布を要求した⁶⁴。ナーシク・ボーイズは自らの奴隷ではないので、一度与えたものを取り上げることはできないとリヴィングストーンは繰り返し首長に説明するが、首長は受け入れず、使者を一行のもとへ送り、エイブラハムとサイモンに対して一晩中、その使者が狼藉を働くなどした。その後も交渉は続き、交渉に出てきた首長の臣下たちは、首長が一行を戦争に巻き込み、食糧をすべて奪い去らうと脅しをかけ、ナーシク・ボーイズ、とりわけサイモンがそれに大きな恐怖を覚えたと言われる⁶⁵。

交渉の続く2月13日、エイブラハムがリヴィングストーンにこの問題の原因となる事実を告白する。すなわち、首長が自身の所有する牛の群れに一行を案内した際、首長は「好きなものを選んで、召し上がってください。そして、私には毛布を一枚ください」と語っていたのをエイブラハムはきちんと通訳していなかった事実がここで判明する⁶⁶。これを知ったリヴィングストーンはその日の日誌にナーシク・ボーイズがいかにも役に立たないかについての愚痴を綴っている⁶⁷。2月15日、首長は古い毛布を一枚受け取り、騒動はようやく一段落した⁶⁸。しかし、リヴ

ィングストンのナーシク・ボーイズに対する不満は収まらず、その翌日の日誌にも、彼らが自分たちを自らと同等であるとうぬぼれていること、何か意見を求めても「閣下のお考えのとおり」としか繰り返さないことなどについて不満を綴っている⁶⁹。首長は別れ際に牛を再び贈与し、一行はそれを解体して分配したが、牛肉を好まないナーシク・ボーイズはそれをカラバッシュやカボチャ類と道中、交換している⁷⁰。

2月19日には、エイブラハムはリヴィングストーンにニウムボ、あるいはヌムボ、ムムボと現地で呼ばれるイモの栽培方法について説明し、同様にジェームスも自分の故郷のニウムボについてリヴィングストーンに語っている⁷¹。第1期のナーシク・ボーイズについては正確な年齢に関する情報を日誌から得ることはできないが、故郷での暮らしに関する一定の知識を得た後に奴隷として故郷を離れたことを、少なくともこの2人については推測できる。

アルバート・バラカの離脱まで

1867年5月中旬、一行はタンガニカ湖南端付近でリエンバ川の流路を探索していた。この頃、アルバート・バラカは隊から離れ、ある集落に留まり、ジェームス・ルットンは道中、3台のクロノメーターを含む自身の担当の荷物を道端に置いたまま、隊から1日離脱している。ジェームスはその日の晩に本隊に再合流したが、

⁶³ DLC/1115/253.

⁶⁴ DLC/1115/253.

⁶⁵ DLC/1115/256.

⁶⁶ DLC/1115/257; DLC/1128/15 February 1866.

⁶⁷ DLC/1115/257-258.

⁶⁸ DLC/1115/258.

⁶⁹ DLC/1115/259

⁷⁰ DLC/1115/259.

⁷¹ DLC/1115/261.

離脱の理由も不平も述べることはなかった。リヴィングストンは、彼らは誰かの助けを借りれば自らの故郷に容易に戻れると考えているが、実際のところ、その故郷の近くを通ったとしても、そこが故郷であると認識できないだろうと綴っている⁷²。8月30日、今度は湖の南西端付近のロフ川付近を探索中、一行はティッパー・ティブの愛称で知られるスワヒリ商人に出会う⁷³。その2日後、2名のナーシク・ボーイズが本隊よりだいぶ後方に滞留し、同行するアラブ人たちに対して、自分たちはリヴィングストンに大量の荷物を運ばされており、「イギリス人は善人と言われているが、そうではないのだ」と訴えていたとされる⁷⁴。リヴィングストンによれば、彼らの運ぶ荷物は奴隷1人当たりの運搬量の約3分の1程度で、2人のうちの1人は3ポンドのビーズが追加されたことで抗議をしていた⁷⁵。この2人のうちに含まれるかははっきりとしないが、アルバート・バラカがこの日、隊を離脱した。彼は数日前に通過したティッパー・ティブの集落に戻ったことが日誌に記されている⁷⁶。リヴィングストン曰く、彼が唯一嫌いなことは労働であり、周囲に共同での逃亡をしきりに持ちかけていた。彼は道中、キノコ採りをするために、薬箱などを地元の子供に預けた際、それら一切を紛失したりしていた⁷⁷。リヴィング

ストンは、彼はザンジバル島に戻り、アラブ人の奴隷の奴隷になるのだらうと記している。

9月25日の日誌には、深い森を進み、ようやく見つけた人里でもアラブ人の襲撃と間違われ、入村を拒否され、行軍を余儀なくされるなか、疲労困憊になったガードナーが大地にぼったりと倒れ込む様子が記されている⁷⁸。この頃になると、他の隊員も疲労が蓄積していることが日誌からも如実に読み取れ、これに業を煮やしたリヴィングストンは、「ナーシクで飯を喰わしてもらい、着るものを与えられ、教育を受けたにもかかわらず、こいつらのなかには奴隷であり続ける者もいるのだ」と記している⁷⁹。

11月16日の日誌には、ジェームスを料理番から外した一件が記される⁸⁰。それによれば、彼はガードナー—リヴィングストン曰く、「もっとも不潔な輩」—が粥を作るための鍋で汚れた足を洗うのを、ジェームスが傍にいたにもかかわらず咎めなかったのが理由として挙げられている。また12月19日には、ガードナーが彼の担当だった袋からビーズを勝手に売り払っていたことをリヴィングストンは発見している⁸¹。

⁷² DLC/1115/279.

⁷³ DLC/1115/302.

⁷⁴ DLC/1115/302.

⁷⁵ DLC/1115/302. それぞれが担当する荷物の分量は、ナーシク・ボーイズにとって大きな関心事で、それは本隊から遅れることの原因にもなった(DLC/1115/305)。

⁷⁶ DLC/1115/302-303.

⁷⁷ ただし、たとえば、1867年1月20日の日誌では、アルバートを「とても慎重な」人物として評価し、それゆえに、薬箱を持たせていたことが記されている(DLC/1115/244)。

⁷⁸ DLC/1129/25 September 1867.

⁷⁹ DLC/1129/24 September 1867.

⁸⁰ DLC/1129/16 November 1867.

⁸¹ DLC/1129/19 December 1867.

1870年の一斉離脱まで

1868年1月2日、サイモンの病気により隊は足止めを食らう⁸²。2月24日、タンガニイカ湖付近の集落に滞在していた一行は、元奴隷で商人のムハンマド・ボガリブという人物の代理人に連れられた奴隷と諍いを起こす。奴隷たちはニヤムウェズィによって屠られた肉を売りに集落に入り、「カーフィル、カーフィル」とはやし立てられたのに一行が反応し、暴力沙汰となった。そのなかでサイモンの頭部に木片が的中し、彼は昏倒してしまった⁸³。この頃、一行はナイル水源の発見を目指して右往左往していたが、随行員たちの疲労がより一層、露わになってくる。エイブラハムは詳細こそ分からないものの、「古い苦情」を口実に暇を申しでて、リヴィングストンはそれを許している⁸⁴。これについて、エイブラハムはウジジに向かい、二度と戻ってこないだろうというジェームスの言が日誌には記されている⁸⁵。ジェームスが翌日にもリヴィングストンが約束した賃金を随行員たちに払わないだろうと広言していたのを、リヴィングストンは日誌に書き留めている⁸⁶。その後、5月3日の日誌にはエイブラハムが戻ってきたことが記されている⁸⁷。エイブラハムの暇乞いを認めたことの記事なかに、暇乞いに関するエイブラハムとリヴィングストンのやり取りは記されていないが、この日の日誌では「エイブラハ

ム、私の伝令」と記されており、リヴィングストンはエイブラハムに何らかの条件を付け、短期間の離脱を許していた可能性が考えられる。エイブラハムはバングウェウル湖とムウェル湖のあいだの地域領域を持つカゼムベが「寛大」であることを報告し、これをリヴィングストンは大変に喜んでいる。

1868年11月15日、この月のはじめから滞在していたカブワブワタでサイモンがシマウマを屠ったことが記されている⁸⁸。リヴィングストンはこのときすでにウジジへ向けて出発することを決意しており、その肉でそれから数日分の穀物や豆類を獲得している。

1870年6月16日カトムバというアラブ商人が拠点とする、タンガニイカ湖北西岸付近のマモヘラ⁸⁹にいたリヴィングストンは次のように日誌に記している。「ナーシクの生徒たちはいまや夫が交易に出て留守中の奴隷女たちと一緒に暮らし、腹いっぱい食べている。(中略)彼らは私に何もしてくれず、誰も私の荷物を持ってくれず、誰も次の地域に行こうとしないがために、マニエーマ(当時いた地域の名称)で彼らのなすがままにいるのを私は見ているばかりである」と嘆き、ナーシク・ボーイズが自らの命令に全く従わない一方、当地の首長には委縮している様子を記している⁹⁰。この頃になると体調が悪化していたリヴィングストンは、もはやナ

⁸² DLC/1129/2 January 1868.

⁸³ DLC/1115/358.

⁸⁴ DLC/1115/371.

⁸⁵ DLC/1115/371.

⁸⁶ DLC/1115/372.

⁸⁷ DLC/1115/394.

⁸⁸ DLC/1115/476.

⁸⁹ バムバツレから南西に7日行程の村とされる (NLS MS.10768, f. 80 [Livingstone to Kirk, 25 March 1871])

⁹⁰ DLC/1115/609.

ナーシク・ボーイズや他の随行者の行動を制御できる状態ではなくなっていた。

1870年7月6日、同年2月初旬に訪れたマモヘラに再び一行は戻っている。そこで住民たちに再会を祝福された。しかし、エドワード・ガードナーは恐らく到着前に通過したアラブ人キャンプで得たと考えられる女奴隷を連れてきていた⁹¹。一行は走り回ったり、銃を撃つふりをしたりと大騒ぎをし、エイブラハムは隊の規律に反して、2羽の家禽と幾ばくかのタバコを手にしてしていた。リヴィングストンにとっては無秩序なこの騒ぎに関連して、「身に危険が及ばない場所であれば、ナーシクの生徒は皆、熱心な奴隷狩り屋なのである。マニエーマでは危険はなく、(戦いの)銃声から自由なのである。ナーシクで豚盗人だった彼らは、いまや嬉々として奴隷盗人になるのである。彼らは求められてもいない奴隷仕事をして、アラブ人に気に入られようとあらゆることをしている」と記している⁹²。このように書くのは、こうした騒ぎに加え、サイモンとエイブラハムがムハンマド・ボガリブに女性の斡旋を懇願しているのを知っていたことであつた⁹³。そして、この日の日誌はこの2人のナーシクで身に着けた技能の問題点を列挙し、彼らは労働と賃金の関係性をいまだ学んでおらず、何もせずして賃金が支払われると勘違いしていると結ばれている⁹⁴。

1870年8月17日に書かれたメモによれば、ルアラバ川を遡上し北上しようとしたリヴィングストンはカヌーの購入を計画するが、随行者たちがそれに一様に反対し、それを断念したことが記されている⁹⁵。そして、彼らの反対は遡上に対するものではなく、これ以上、探検を続けることに対するものであつたことを彼は理解する。これに気付くのと同時に、給与として与えようとしたビーズについても受け取りを拒否されたリヴィングストンは、当時、同行していたアラブ人に随行者たちが逃亡を企てていると告げられている⁹⁶。そうしたなかで、リヴィングストンとサイモンの関係性も変化していた。リヴィングストンは、「サイモン・プライス某がカブワブワタで2人のベンバ人を殺害して以来というもの、彼は盗みを働き、嘘を吐き、不潔であらゆる不道徳を併せ持つ厄介者になってしまった。私は決してこんな奴らと一緒にいたくはないが、他に誰もいないし、随行員の追加を頼んだ手紙の束も破られてしまったのではないかと恐れている」とも同日の日誌に記している⁹⁷。

1870年8月の一斉離脱とそれ以降

1870年8月17日、ナーシク・ボーイズはガードナーを残して全員が隊を離脱する。エイブラハムとサイモンが首謀者であつた。リヴィングストンは、マモヘラで出会った夫の留守を守る女性たちに会いに行くためであると離脱の動機

⁹¹ DLC/1115/612.

⁹² DLC/1115/612.

⁹³ DLC/1115/612.

⁹⁴ DLC/1115/612.

⁹⁵ DLC/297a.

⁹⁶ DLC/297a.

⁹⁷ DLC/1115/609-610. NLS/MS.10703/XXXVI には彼がマニエーマで盗みを働いていたことが後日談として記されている。

を推察している⁹⁸。離脱を宣言されたことに対して、リヴィングストンはザンジバルのスルターンがジョン・ハニング・スピークの探検隊からの離脱者を処罰したこと、ナーシク・ボーイズが自分を「人喰いの土地の真ん中で」放り出したことを在ザンジバル英領事が知れば激昂するだろうことを加えながら、離脱しないよう説得に努めたが、サイモンは「『僕は悪い少年です』って書くから、紙をよこしな」、「サイド・マージドが俺を鎖でぐるぐる巻きにすりゃいい、殴りゃいい、撃ちゃいい」などと言い、挙句に「誰があいつ（リヴィングストンのこと）のものを運ぶんだい」と大笑いしながら彼のもとを去っていったとリヴィングストンは記している⁹⁹。彼らはガラス玉や布、ナイフなどを勝手に持ち去ったとされる¹⁰⁰。リヴィングストンはその様子に続け、「彼（文脈からエイブラハムのことを示すと考えられる）は7年に亘る労働に疲弊してしまったのだ」¹⁰¹と分析をすると同時に、自らがアラブ人と同じように体罰を与えることをしなかったために彼らはわがままに振る舞うようになり、それが離脱の遠因であるという理解も日誌に記している¹⁰²。また、それに関連して、彼らがカブイレという集落で殺人を犯したことについても言及されている¹⁰³。その

後、10月19日、離脱したナーシク・ボーイズは、ムハンマド・ボガリブに同行することをリヴィングストンに使者を介して伝える¹⁰⁴。

しかし、翌年1月22日に彼らは再び、リヴィングストンの前に現れ、二度と離脱しないことを誓い、帰隊を申し入れる¹⁰⁵。リヴィングストンは首謀者のサイモンとエイブラハム以外の帰隊を許した¹⁰⁶。それでもサイモンとエイブラハムは隊に紛れて同行し、第三者を介して帰隊を懇願するなどしていたが、リヴィングストンは彼ら2人に対して大変に立腹しており、赦すことはなかった¹⁰⁷。

その後、1871年2月4日、帰隊をしたナーシク・ボーイズのひとりジェームスが食糧調達に出た際、現地民によって弓矢で射殺された¹⁰⁸。この一件に関する記録のなかでジェームスについて、リヴィングストンは、「ナーシクから来た私の使えない奴らのひとり」と表現し、彼が自らの望んでいた北へ針路をとることを拒否していたことも記している¹⁰⁹。なお、この殺害者は数日後に現地の人々によって捕えられ、その後、射殺され、その肉を食べられている¹¹⁰。

2月12日には、ナサニエルの体調が悪化し、隊は足止めを喰らっている。コレラのような症状が出ていると翌日の日誌でリヴィングストン

⁹⁸ DLC/297d/XVII.

⁹⁹ DLC/297a.

¹⁰⁰ DLC/297a.

¹⁰¹ DLC/297a.

¹⁰² DLC/297a.

¹⁰³ DLC/297a.

¹⁰⁴ DLC/297a.

¹⁰⁵ DLC/297b/LXXVI.

¹⁰⁶ DLC/297b/LXXVI.

¹⁰⁷ NLS/Ms.10701/154; NLS/Ms.10703/LXXXIV.

¹⁰⁸ NLS/Ms.10703/LXXXIV; DLC/Cat1115/617.

¹⁰⁹ DLC/1115/617.

¹¹⁰ NLS/Ms.10703/LXXXVI.

は記しているが、その後、体調がとても悪いと訴えるナサニエルを連れて隊は出発する。リヴィングストンは彼の訴えを「ナーシクの甘やかし学校にいた者たちすべてがやるよう」なものとして捉えている¹¹¹。また、この日、帰隊を許されないなか、本隊に随行を続けていたサイモンとエイブラハムに対して、ついにリヴィングストンは業を煮やし、隊から去らなければ撃つと通告する¹¹²。これ以降、リヴィングストンの日誌類にこの2人は登場しなくなった。

1872年8月11日に到着したリヴィングストン救出隊についてリヴィングストンは感謝の気持ちを記しているが、そこに第2期ナーシク・ボーイズに関する記述はない¹¹³。また、この頃になると、ナーシク・ボーイズ自体に言及することもほとんどなくなっていく。1872年から翌年5月1日の彼の死までの日誌類のなかで、ナーシク・ボーイズに関する言及は、隊員に振り分けた荷物のリストに個人名が見えるのを除けば、ナサニエルに関する罵詈雑言とナーシク・ボーイズ2名が牛を失くしたことのみである¹¹⁴。

リヴィングストンの亡骸は隊員らによって沿岸部まで運ばれる。沿岸部に到着した時点で隊に残っていた第1期ナーシク・ボーイズはナサニエルとガードナーのみであった。リヴィングストン死後の隊の行動については、第2期ナーシク・ボーイズのジェイコブ・ウエインライトとカルス・ファッラールによる記録である程

度、窺い知ることができるが、ナサニエルとガードナーに関する情報は少ない。わずかに、カルス・ファッラールがその日誌中で2人は第2期ナーシク・ボーイズに対して非協力的だったと記すのみである¹¹⁵。

ファッラールの日誌やリヴィングストンの書簡、先行研究などを総合すると、離脱した第1期ナーシク・ボーイズの離脱後については、以下のような情報が得られる。すなわち、サイモンはアフリカ大陸東部で交易に従事し、エイブラハムはムウェムベに戻り、ルーベンはいーヒーらとともにザンジバル島に戻り、そこで病床に伏せていたが、その後、ボンベイへ帰還したとされる¹¹⁶。アルバートについても、ザンジバル島に戻ったとされる¹¹⁷。アンドリューはマタカ王のもとに戻ったとされる¹¹⁸。

おわりに

ナーシク・ボーイズは、聖公会宣教協会ナーシク伝道所によって宣教における有用な人材育成の目的のもとに作られた生活環境に身を置き、教育を受けてきた人々であった。洋上でのイギリス王立海軍の奴隷交易廃絶活動によって、奴隷身分から救出されたアフリカ大陸東部出身の幼年者たちを聖公会宣教協会が引取り、自前の施設で養育するうえで、将来の宣教活動に資する人材を育成することも、また、宣教師であり、探検家でもあったリヴィングストンが

¹¹¹ NLS/Ms.10703/LXXXVI.

¹¹² NLS/Ms.10703/LXXXVI

¹¹³ DLC/1131.

¹¹⁴ DLC/1131.

¹¹⁵ CMS B/OMS/Z/19.

¹¹⁶ DLC/1142/53; CMS B/OMS/Z/19; Simpson 1975, 60

¹¹⁷ RGS DL4/6/2 [Livingstone to Seward, 25 September 1867]

¹¹⁸ Simpson 1975, 61.

限られた資金のなかでより効率的に探検を進めようと画策するなかで、そうした経緯を持つ彼らに白羽の矢を立てることも、特に驚くべきことではない。このように、イギリス帝国の枠組みのなかで奴隷交易廃絶と宣教、そして探検が結びつくことで、第1期ナーシク・ボーイズのアフリカ大陸への渡海は成立したのである。

彼らのアフリカ大陸への渡海に、彼ら自身が故郷に戻りたいなどの自発的な動機を強く有していたことを如実に物語る文献は管見の限り見当たらない。事実、エイブラハムはみずからの親族と対面し、そこで周囲から強く残留することを乞われていたのを拒絶し、探検への随行を続けているのである。また、結果的には、リヴィングストンの亡骸とともにアフリカ大陸東部沿岸に帰還を果たした第1期ナーシク・ボーイズは9名中2名に留まり、そのほかの者は途中で死去するか、隊から離脱してしまった。探検中の彼らの言動は、本稿で依拠したリヴィングストンの記録に依れば、ナーシク伝道所の宣教師たちや探検開始前にリヴィングストンが思い描いていた活躍とかい離していたといわざるを得ないだろう。

これら本稿で明らかになった点を踏まえれば、第1期ナーシク・ボーイズのアフリカ大陸への渡海とは第一に、イギリス帝国の枠組みのなかで奴隷交易廃絶、宣教そして探検が結合するなかで生じた出来事であった。この出来事は、宣教や探検における有用性を宣教師や探検家が彼らのうちに見出したことによってもたらされた側面が大きい。特にリヴィングストンについていえば、第1期ナーシク・ボーイズに関する言及に通底するのは、探検遂行上の有用性

に照らし合わせた上での彼らに向けられる評価する視線である。その有用性とは、リヴィングストンと現地社会とのあいだの媒介者としてのものであり、その役割は彼らがアフリカ大陸出身者、つまり「アフリカ人」であるという側面に焦点を当ててこそ現出するものであったはずである。実際に、スーパーヒーラには探検の途上で通訳を求めるようなことをリヴィングストンはしていない。

では、本稿で焦点を当てた第1期ナーシク・ボーイズはリヴィングストンが当て嵌めようとするような「アフリカ人」という属性を自らのうちに見出していたのだろうか。本稿で拾い上げた記事による限りは、少なくともそのような属性を彼らが強く抱いていたとは考えられない。たしかに、彼らのうちの多くは、隊を離脱し、アフリカ大陸に残留する。しかし、繰り返し帰隊の許しを得ようとしたサイモンやエイブラハムの姿からはそうした選択が彼らにとって望んだものであったようには考えられない。また、ルーベンやアルバートが噂通り、ザンジバル島やボンベイに落ち着いたのだとすれば、ボンベイは言うに及ばず、英領事館が置かれるザンジバル島もまた、イギリス帝国のネットワークで繋がれた場所であることを意識する必要があるだろう。では、ルーベンやアルバートがイギリス帝国に強い帰属意識を持っていたのかといえば、それもまた留保が必要だろう。そうだとすれば、一体、彼ら自らはどこに自らの帰属、アイデンティティを寄せていたのだろうか。この点については、リヴィングストンの記録以外にそれを探る手掛かりが必要であり、また、第1期ナーシク・ボーイズに限らず、第2

期ナーシク・ボーイズやその他のボンベイ・アフリカンと併せて考察すべき課題であると考え
る。それについては稿を改めたい。

文書館・史料略号

CMS: Church Mission Society Archives, Special
Collection, University of Birmingham,
Birmingham, UK.

DLC: David Livingstone Centre, Glasgow, UK.

IOR: India Office Records, British Library, London,
UK.

NLS: National Library of Scotland, Edinburgh, UK.

Report: *Report of the Bombay or Western India
Auxiliary Church Missionary Society.*

RGS: Royal Geographic Society, London, UK.

参考文献一覧

Anderson, Richard and Henry Lovejoy (eds.) 2020,
*Liberated Africans and the Abolition of the Slave
Trade, 1807-1896*, Rochester: University of
Rochester Press.

Edwardes, S.M. 1909, *The Gazetteer of Bombay City
and Island*, 3 Vols., Bombay: Times Press.

Helly, Dorothy O. 1987, *Livingstone's Legacy:
Horace Waller and Victorian Mythmaking*,
Athens: Ohio University Press.

Livingstone, David 1874, *The Last Journey of David
Livingstone, in Central Africa, from 1865 to His
Death*, ed. by Horace Waller, 2 Vols., London:
John Murray.

Livingstone ----- and Charles Livingstone, 1865,
*Narrative of an Expedition to the Zambesi and Its
Tributaries*, London: John Murray.

Simpson, Donald 1975, *Dark Companions: The
African Contribution to the European
Exploration of East Africa*, New York: Barnes
and Noble.

Suzuki, Hideaki 2017, *Slave Trade Profiteers in the
Western Indian Ocean: Suppression and
Resistance in the Nineteenth Century*, New York:
Palgrave.

鈴木英明、2007「インド洋西海域と『近代』—
—奴隷の流通を事例にして」『史学雑誌』
116:7, 1-33.

鈴木英明、2016「インド洋西海域周辺諸社会に
おける近世・近代移行期とその矛盾：奴隷
制・奴隷交易の展開に着目して」『史苑』77,
107-126.